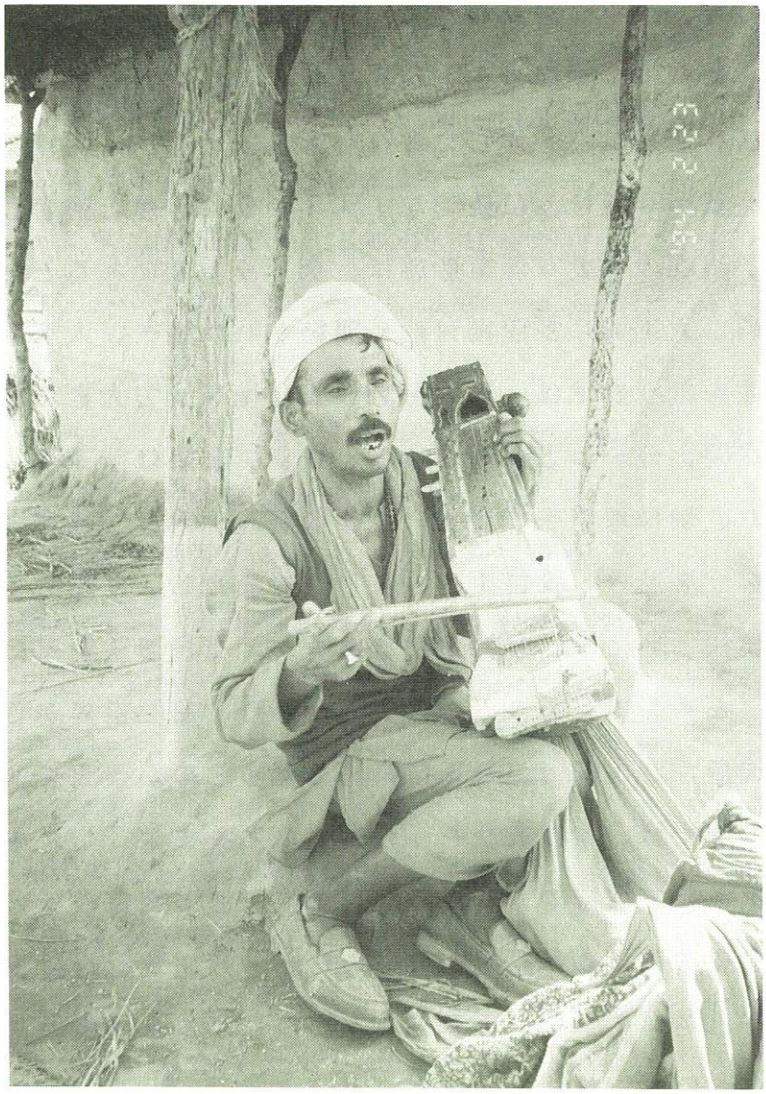
開発教育ニュースレター



ネパール・ジャナクプール郊外の農村にて

自分の人生を歌に託して・・・・

山田肖子（東京都）

No. 47

1994. 3

開発教育協議会

シリーズ開発教育地域拠点訪問
第２回　アジア学院

東京ＹＭＣＡ語学教育研究所主催の『第５回那須野ヶ原一泊セミナー＜アジア、アフリカに聴き学ぶセミナー＞』に参加し、アジア学院を訪ねた。学校法人アジア学院アジア農村指導者養成専門学校は、1973年に「人のいのちとそれを支える食べ物を大切にする世界を作ろう、共に生きるために」というモットーを掲げ創立された。アジアやアフリカ、太平洋諸島など第三世界の人々を学生として招き入れ、「食」の問題を中心にアジア学院のキャンパス（６ha＝約１万8000坪）や学院内外での実習、講義、研修活動などを通して教育を行っている。

「農業」という言葉から受ける伝統的なイメージは、自然と密着したエコロジカルなものであるが、現在の主要な農業形態は、全くその逆であるといっていい。多くの農薬と化学肥料、人工的に多収穫可能に開発された種子、大型機械を使用し、低コストで大量生産を行う農法は、地力を奪い去り地球上で大きな環境破壊を巻き起こしている大きな要因の一つとなっている。アジア学院は、「食」をめぐるこうした現状を問い直し、地球環境を“持続”させながら、人々（現在、そして未来に続く人々）の自主自立を助ける食料生産の在り方を模索し、実践しているのである。

エコロジカルな農法といえば、有機農法であるが、有機農法を単に「無農薬、無化学肥料栽培」と、とらえてしまうとコストもかかり、第三世界から来日している学生にとって、有機農法が本国での適正技術になりうるのか疑問をもたれてしまう。そのため、アジア学院では、有機農法を「人のいのちを支え、しかも、私たちの自然や社会環境を適正な形で維持できるような農法」として意味づけて、その技術を創立以来（当時有機農法は、まだ見直されていなかった。）試行錯誤しながら学生に教えている。現在、アジア学院の食堂で人々が口にする食べ物のおよそ９割は、学院内で生産されたものである。

今回のセミナーで、Speaker の一人となってくれたザンビア出身のJOHN NYONDOさんは、「ザンビアで農業大学を卒業したが、農薬、化学肥料の問題を知ったのは、アジア学院に来てから。日本における有機農法への関心は、非常に高まってきている。今後、10年ほどの間に、日本の主要な農法は、有機農法へと転換していくと思われる。私の国ザンビアでは、こうした気運は高まっていないが、私たち、そして未来の子供たちの健康のために、私はここで学んだ有機農法の必要性を訴えていくつもりだ。事実、ザンビアでの私のこうした活動は、始まっている。」と、熱い思いを語ってくれた。（JOHNさんは、1983年にアジア学院での１年間の研修を終え、帰国してから再びアジア学院の研究生として来日している。）こうした、農法における問題だけでなく、ＯＤＡや不平等貿易など南北問題をめぐるさまざまな事柄についてもアジア学院の学生たちは精通している。これもアジア学院の充実した教育体制のあらわれであろう。

今回のセミナーで、アジア学院の創設者であり理事長である高見敏弘先生は、朝の礼拝で、聖書のルカによる福音書13章18節～21節を引用され、子孫のために自分の出来ることをなすべき必要性を説かれた。

> 『そこで、イエスは言われた。「神の国は何に似ているか。何にたとえようか。それは、からし種に似ている。人がこれを取って庭に蒔くと、成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作る。」また言われた。「神の国を何にたとえようか。パン種に似ている。女がこれを取って３サントの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」』

これまでアジア学院が送り出した卒業生の数、約750 名。現在アジア学院で働くボランティアの数、14名。１年間にアジア学院をワークキャンプなどで訪れるワーキングビジターの数、約500 名。高見先生によって植え付けられた沢山の種は今、世界中で芽をふいている。

学校法人アジア学院
連絡先＊　栃木県那須郡西那須野町槻沢４４２－１☎0287-36-3111
東京ＹＭＣＡ語学教育研究所
連絡先＊　東京都千代田区神田美土代町７　☎03-3293-9661
次回那須野ヶ原一泊セミナーは、
５月７～８日、７月２～３日、９月24～25日の予定（すべて土、日曜日）

尚、このセミナーには、社会人、大学生に加えて高校生が２名参加していた。彼らが、一所懸命英語でのコミュニケーションに取り組んでいる姿に、21世紀を担う若い力を感じた。

文責　中島由記

紛争解決をめざすユニセフの平和のための教育

開発のための教育 Education for Development を主張しだしてから，ユニセフのこの分野の教育活動はうんと幅を広げたようである．狭い意味での開発問題だけでなく，平和や人権などの問題解決のための教育活動がとりあげられ，発展途上国の活動が盛んに報告されるようになった．ユニセフがその Edevnews 1993年11月号で報告している紛争解決をうながす平和のための教育も，その一環である．

紛争状態をシミュレーションによって解決の方策を考えさせようという紛争解決学習は，1970年代後半に工業国の学校で実践されたものだが，今回のユニセフの conflict resolution を意図する平和のための教育は，いずれも紛争対立が現に続いている国で推進されているところに基本的な違いがある．モザンビーク，レバノン，ライベリア，スリランカ，サラエヴォで，いずれもユニセフがそれぞれの教育当局あるいは有志と協力して，現地に実状にあった平和教育を展開しているのが，ユニセフの新しい紛争解決平和教育である．

一つの例としてスリランカの計画をみてみる．スリランカのそれは紛争解決のための教育事業と銘うたれ，1989年から企画されてきたものである．基本的な対象は教員であり，教員に改めて平和と寛容の価値を認識させ，それぞれの専門教科教育を通じてそれを児童生徒に浸透させようと，教員の再訓練を行う計画である．具体的には，①批判的な思考－ステレオタイプ的な考え方や他者についての否定的な見方に基づいているかもしれない常識的な考えを批判的に再検討する，②感情移入－自らを他者の立場においてみる，③自信－自らに対する積極的気持ちと態度を育てる，④協力－一つの目標をめざして他者と一緒にはたらく，という価値観や態度を教育者に教えることから始めようというもので，1996年までには1万の学校の教師に必要な学習材が届けられるように計画されている．

これによって人種対立の根本が少しでもやわらげばという願いがこめられており，またその成果は学校内の授業に生かされるだけでなく，ラジオやテレビなどを通じて一般国民にも訴えるとしている．

スイス中等学校の人権教育

ユニセフの Edevnews 1993年11月号に掲載されたスイス中等学校の教師，ミレイユ・バルビアの考え．

私の教える生徒たち（14－16歳）も人権というのはすばらしいものだが，実生活にはあまりかかわりのない抽象的なものだと考えている．それではいけないので，私は人権を教えるのに生徒の相互影響と協力を媒介とする方法を試みた．

教室で，みんなにはどういう権利があるかと聞いてみる．外出する権利，思ったことを口にする権利，服装や友人を決める権利，きわめて日常的な答えが返ってくる．次に，人権という言葉をテレビで聞いたり新聞で読んだりしても，同じようなことを連想するかどうかを尋ねる．そうするとテレビなどでの人権という言葉には，飢え，戦争，人種差別などによる権利の侵害，表現の自由，人間の尊重　などを連想していることがわかった．生徒たちは自分の権利と人権とを明らかに区別して考えている．

世界人権宣言と子どもの人権条約を読ませ，新聞に載ったさまざまな写真を見せて，写真がどういう権利にかかわるものであるかを尋ねる．事例報告などを読んで，人権侵害に対抗する動きや葛藤を解決する難しさ，などを知るようになる．

次に自分の権利と他人の権利とのかねあいの問題を提起する．親や教師にどんな権利があるかという質問には，誰にも権利はあり，誰にも他者に対する責任があると答える．自分の意見が聞き入れられるべきだという権利と親や教師の意見が聞き入れられるべきだという権利とをどうすれば一致させることができるのかなどと尋ねると，いろいろな考え方がでてくる．人権問題が実生活ではいかに複雑な問題をはらんでいるかに気がついてくる．

共有する放牧地についての争いの状況をシミュレートし，長老会議の調停ということで，生徒を二つの村と仲介者のグループに分けてロールプレイそしてディベイトを試みる．なかなかに説得的な論理が展開されて，どちらが勝者とも決めかねる論戦だったが，その過程で生徒たちは，紛争を解決するのがどれほど難しいかを認識した．国連の場での協議が思わしい成果を生まないで終わることの多い理由にも思い当たるようになった．他者に対する尊敬がすべての話し合いの基礎でなければならないと知ったし，世界の紛争を解決することを学ぶためには人権を学習する必要があることを知った．

ごく自己中心的な人権の理解から自らの権利が世界中の人間の権利とつながっていることを知るようになった．紛争解決の難しさも知った．次はその認識を行動に移していくようにさせることだろう．

増え続ける世界の難民

今世紀後半の最大の問題の一つに，この20年間に10倍も増えたという難民問題があるが，1993年1月現在で世界には1900万人の難民がいるという．その34%は南西アジアから中近東，北アフリカにかけての地域で発生している．アジア大洋州は109万人ほどで全体の6%近くである．難民を庇護している国ではマラウイが最大で100万人をこえ，続いてスーダン，ドイツ，クロアチアなどとなっている．

アジアの最大の難民発生国はベトナム，そしてミャンマー，スリランカであるが，庇護国は中国，インド，バングラデシュの順で，いずれも20万人を超える難民が流入している．日本で引き受けている難民数は8,200人で，日本より引き受け数の少ないアジアの国は，パプアニューギニアとフィリピンがそれぞれ6,700人ずつ，韓国とシンガポールが100人ずつだけである．（1993年12月作成のUNHCR駐日事務所作成の資料による）

いっしょにやってみませんか

新・運営委員募集！

開発教育協議会は、事務局のアルバイトを除くとすべてボランティアの力で運営されています。このニュースレターも、年３回の機関誌も、また、夏の全国研究集会を始めとする各種の催しも、企画から運営まで、すべてボランティアによって作られているのです。

ボランティア（運営委員）は、現在、約１５名。月１回の全体ミーティングに出席するほか、それぞれ担当のプロジェクトで活動しています。

開発教育協議会では、新年度を目前にひかえ、活動のより一層の充実を図るため、新しい運営委員を募集します。

運営委員は、協議会の会員であれば、誰でもなることができます。あなたもやってみませんか。印刷物の編集をやってみたい方、イベントの運営をやってみたい方、大歓迎です。事務局まで気軽にご連絡ください。

開発教育協議会の総会が開かれます

来る５月１４日、開発教育協議会の１年間の活動を総括し、今後の活動について話し合うための総会が開かれます。場所は東京ＹＭＣＡ国際奉仕センターです。

協議会会員がじかに顔を合わせる数少ない機会です。ぜひ、ご参加ください。内容など詳しくは後日改めてお知らせいたします。

と　き　５月１４日（土）　13:30〜16:30
ところ　東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター・ホール
問合せ　開発教育協議会事務局

理事会・運営委員会の記録

理事会　１月２０日
- 会員の拡大について
- 全国研究集会について　　など

運営委員会　１月１３日
- 各作業チームの報告と協議

２月２３日
- 各作業チームの報告と協議
- 総会について
- 全国研究集会について

差し上げます

開発教育国際フォーラム

「“地域”は“世界”を変えていく」報告書

昨年１月に横浜で行なわれた開発教育国際フォーラムの報告書（Ｂ５版、１１０頁）ができました。海外ゲストによる基調講演、パネル・ディスカッション「日本における開発教育の到達点と課題」、１０のテーマで行なわれた体験トリップ＆分科会などの記録のほか、「1993年地球市民宣言－２１世紀に向けた開発教育アクションプラン」が収録されています。

開発教育協議会では、この報告書を送料のみでお分けします（ただし、１人１冊、先着１００名）。

ご希望の方は、協議会事務局に電話で申し込みの上、送料をお送りください。

会費の納入をお願いします♡

開発教育協議会の運営費は、主に会員からの会費によってまかなわれています。会員の期限が切れている方は、早目に会費を納入していただきますようご協力をお願いします。

満蒙開拓と少年たち

蒼い記憶

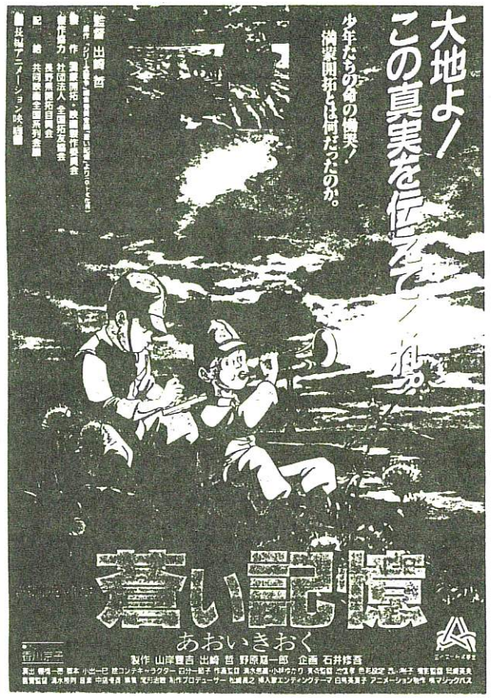
１４〜１５歳前後の少年をソ連国境へ送り、開拓と警備にあたらせた「満蒙開拓青少年義勇軍」。あの中国残留孤児の悲劇につながる歴史の事実を描いたアニメーション映画。

とくに少年義勇兵の募集に学校の教師が果たした役割を見ると、教育の現場にたずさわる者の責任の重さについて考えさせられる。

実は、この映画の原作は、小中学校の先生が調査して書いたものだという。

学校の先生方には、ぜひ見ていただきたい映画である。

（木下理仁）



新入会員伊藤祐禎（神奈川）阿部理恵子（東京）村上ひろみ（愛知）三橋真理（U.S.A.）斉藤英司（山形）下田賢一（神奈川）玉山ともよ（大阪）吉田武夫（岩手）竹宇治和佳子（長崎）前田久（長崎）久津輪雅（長崎）礎合宗隆（埼玉）川原光祐（熊本）伊藤純子（愛知）高橋賢一（神奈川）大島純子（東京）平岡昌樹（大阪）黒田賢一（大阪）小野静子（神奈川）西畑俊子（長崎）磯田厚子（千葉）

継続会員山口昌郎（千葉）とちぎＹＭＣＡ（群馬）山本恵子（愛知県）加藤明宏（大阪）斉藤彦（鳥取）青木麻美（埼玉）豊田市国際交流協会（愛知）千葉大健（宮城）永井秀明（広島）木村暁雄（東京）佐野伸樹（兵庫）市岡美奈（神奈川）北俊夫（埼玉）大柿裕美（埼玉）加藤富子（愛知）蒲美由紀（神奈川）安達弘一（東京）阿部直子（東京）望月浩明（神奈川）シャプラニール＝市民による海外協力の会（東京）井村誠（大阪）岩崎裕保（大阪）片桐洋史（東京）幸田雅大（東京）高塚康子（東京）小野静男（福岡）国際子ども権利センター（大阪）田中力（東京）西浦昭英（神奈川）竹前雅子（長野）猪狩みき（東京）笹川平和財団（東京）臼井香里（神奈川）西川潤（東京）角田仁（東京）藤原孝章（兵庫）石川信克（東京）泉康夫（神奈川）秀島一光（東京）東広史（埼玉）上岡直子（埼玉）外崎富代（東京）桐山潤（愛知）木下理仁（神奈川）永瀬一哉（東京）田中和徳（新潟）日本労働組合総連合会（東京）澁澤弥生（大阪）後藤孝太郎（大分）かんさいセミナーハウス（京都）

以上，いずれも１９９３年1月5日〜１９９４年2月25日受付分，敬称略，受付順

Event Memo

第10回 開発教育座談会

初心者でも気軽に参加できる座談会。今回のファシリテーターは、グローバル・エディケーション・センター代表で、開発教育協議会運営委員でもある米山敏裕さん。

と　き　4月20日（水）　19:00～21:00
ところ　東京YMCA
　　（千代田区神田美土代町7）
参加費　300円
問合せ　☎03－3207－8085
　　（開発教育協議会）

「世界経済の中の森林経営」

1ドル－100円という時代のなかで、ますます輸入材へ依存していく日本。日本の内外の森林保全を進めていくためには、どのような道をとるべきか。日本、海外の事例から学ぶ。

と　き　4月17日（日）　15:30～17:40
ところ　早稲田奉仕園204号室
　　（新宿区西早稲田2－3－1）
参加費　1000円
問合せ　☎03－3378－1991
　　（サラワク・キャンペーン委員会）

第3回NGO国際フェスティバル 国際ボランティア見本市

毎年、20以上のNGOが一堂に会してそれぞれの活動を紹介している。今回は、参加者に自分に合ったNGO、自分に合った関わり方を見つけてもらおうというねらいで企画されている。NGOの活動紹介やボランティア体験談を聞くコーナーのほかに、アジア・アフリカのエスニック料理、手工芸品の販売コーナーなどもある。

と　き　3月19日（土）　11:00～17:00
　　3月20日（日）　11:00～16:00
ところ　東京YMCA
　　（千代田区神田美土代町）
入場料　無料
問合せ　☎03－3293－7011
　　（フェスティバル実行委員会）

国際協力・国際教育リーダーシップ養成塾 地球市民アカデミア

共働学習を通じ、21世紀の地球社会に求められる人間像を求める連続講座。
講師は、池住義憲氏（アジア保健研修所事務局長）、金谷敏郎氏（園田学園女子大学教授）、北沢洋子氏（アジア太平洋資料センター共同代表）、久保田順氏（立教大学教授）など。

と　き　1994年4月15日～1995年1月22日
　　（全15回）
ところ　東京YMCA国際奉仕センター
　　（千代田区神田美土代町）
対　象　将来、国際協力、国際教育の分野で活動したいという意欲を持ち、原則として全回参加できる人。
参加費　50，000円（合宿費用は別）
定　員　30名
申込み　所定の申込み用紙に記入し、裏面に「私の考える国際協力・国際教育」というテーマで作文を書き、下記へ送る。
　　〒101
　　東京都千代田区美土代町7
　　東京YMCA国際奉仕センター内
　　「地球市民アカデミア」事務局
問合せ　☎03－3293－7011
　　（「地球市民アカデミア」事務局）
主　催　東和大学国際教育研究所
　　NGO活動推進センター
　　東京YMCA国際奉仕センター

子供の絵画と写真展＆難民キャンプ報告会 「難民ってだれ」

Ⅰ　難民キャンプ報告会
「キャンプ・サダコ」

UNHCR（＝国連難民高等弁務官事務所）の佐藤幸江さんと、ケニアの現地研修に参加した大学生3名の報告。

と　き　3月26日（土）　14:00～17:00
ところ　とよなか国際交流センター
　　（阪急宝塚線豊中駅下車10分）
参加費　無料

※報告会終了後、「ユース交流会」も予定されている（要申込み、500円程度）

Ⅱ　展示会情報コーナー

難民の子供の絵画展、写真展、キャンプの立体展示、難民問題に取り組むNGOの紹介など。

と　き　3月26日～3月31日
　　10:00～17:00　28日（月）休館
ところ　とよなか国際交流センター
入場料　無料

問合せ　報告会、展示会ともに
　　☎06－843－4343
　　（とよなか国際交流協会）

JICA20周年記念 高校生エッセイコンテスト

《自由作文部門》
題は自由。開発途上国について日頃考えていることなどを書く。
《テーマ論文部門》
「地球環境を守るため、日本は何をすべきだと思いますか」というテーマで論じる。

応募資格　1994年4月現在、高校生であること
募集期間　1994年2月14日～5月16日
応募規定　本文　400字詰原稿用紙（A4版）縦書き5枚以内（自由作文）
　　3枚以内（テーマ論文）
　　別添　400字詰原稿用紙（A4版）に①住所（郵便番号）、②電話番号、③氏名（ふりがな）、④年齢、⑤性別、⑥学校名、⑦学年、⑧どのようにしてこのコンテストを知ったか、⑨海外旅行等の経験の有無を明記
　　封筒　「自由作文」「テーマ論文」「両部門」在中のいずれかを明記
問合せ先　☎03－3346－5029

※　読者の皆さんからの情報をお待ちしています。締切りは偶数月の15日。協議会事務局（ニュースレター係）宛にお送りください。

編集室から……

■ようやく暖かくなってきました。桜の花と花見の宴が待ち遠しい今日この頃です。

■しかし、花見もいいですが、「開発教育をサカナに酒を飲む会」というのもわるくないと思いませんか。肩肘張らずに開発教育を語りたいですね。

■協議会の運営委員は、いよいよ夏の全国研究集会の準備に取り組みはじめました。今年は2泊3日でじっくりやろうと、皆、張り切っています。今年の全研はきっと面白いものになるはずです。8月19日～21日の3日間の予定をあけておいてください。

（K）

開発教育 ニュースレター
隔月刊
1994年　3月1日発行
第47号

発　行：開発教育協議会
〒169　東京都新宿区西早稲田2－3－18－61
TEL：03（3207）8085
（10:00～17:00）
FAX：03（3207）0226

お願い：ファックスには必ず「開発教育協議会」と宛名を明記してください。

編　集：ニュースレター編集チーム

開発教育協議会は、開発教育の推進に関心をもつ団体、個人であればどなたでも入会できます。会員の方には、協議会が発行する研究誌をはじめ、ニュースレターや研究集会・ワークショップ等のお知らせをお届けします。また、研究集会の参加費割引の特典もあります。
会費、入会の手続き等、詳しくは協議会事務局までお問い合わせください。